

2016/07/20

公共人類学 2. 応答する人類学 コメントペーパー

この章を読んでいて、この論文の筆者は、今まで読んできた章の人類学者とは異なる点があった。それは、人類学者としての立場に、感情が大きく揺れ動いていることである。彼は、研究者としての業績を上げるため、あるいは学問のために「客観的」な調査を淡々とこなし、聞くことを当たり前と捉え、民族誌や報告書を完成させることに徹し、に書くことに熱中してしまいがちな人類学者のアプローチに懐疑的になっていると考えられる。彼は、フィリピンの噴火後に現地に赴いた際に、自分はボランティアとしての知識や技術を持ち合わせておらず、人類学者としての無力さを痛感していた。彼の考えは、彼の置かれていたと思われる状況に自分を投影すれば、くみ取ることができる。しかし、私は、ボランティアとしての行動と人類学者としての行動の違いはグレーゾーンであり、この筆者は一体どちらになりたかったのかという点が疑問に残った。彼は、被災者の悲嘆や苦悩や思い出を、ただただ聞き、応答することを通してボランティアとして活動したいと思う自分に折り合いをつけていたのではないかと捉えられる。また、このようなスタンスでフィールドワークに臨めば、記録は自然と物語的な論調になることは容易に想像ができるだろう。そうした方法や姿勢が学問的に認められるかどうかは、筆者のいう「災害の人類学」という未開拓な研究分野の広がりに関わっているのだと考えられる。私は、筆者が違和感を覚えた「インフォーマント」という言葉には、ポストコロニアル的な含意があると感じた。フィールドワークの現地で出会う人々が分析・処理の対象となり、知識人に活用されていく過程は、未開の地に赴き、自文化中心主義の視点を排除することに苦戦し続けた欧米人の姿を想起させるからである。よって、学者と現地で出会う人々との関係性の再考は、こうした潜在意識を気づかせるという点で大きな意味を持つのではないかと考えられる。ただ、人類学が物事を相対化して調査し、パブリックな空間で学ぶ中で、学者と現地の人々というプライベートな関係を強調しすぎてはいけないのではないか。

2. 応答ある人類学

- 。聞くことをおろそかにしている人類学者への警告のような文章であるが、そもそも彼らの調査方法に疑問をもったことがあった。(当然調査対象と適切な対話をし、それを基に民族誌を作成していると思っていた)「応答ある」という文言をわざわざつけなければいけないほど、人類学は不適切な状態なのか。
- 。人類学とは学問と言いつつも、個別的事象に介入し個人の心を救済しようとしているようだ。筆者のピクトウ山噴火後の友人との対話の記述を読み、特にそう感じた。私は果たしてそれは学者の仕事なのだろうか。疑問に思う。それは、カウンセラーや他の職種の仕事ではないだろうか。もちろん現地で調査を行えば人々とのつながりも生まれ、筆者のようは葛藤も起つり得るだろう。しかしカウンセリングを行った時点で人類学者の名を返上しなければいけないのではないかと思う。あくまでも客観性を重視するならば、対象とは「インフォーマント」であることを維持しなければならぬのではないか、と思った。

第2章 応答する人類学

<疑問>

- ・人類学者が自身のフィールドワーク調査で得た経験や情報を、一般の人々に対しても公開し、関心をもってもらうためにはどうするべきか（会報や新聞・雑誌の記事などが有効と言えるのか）
- ・今までの章を読んでみて、人類学者は個人プレーで研究を進めているという印象を受けたが、人類学会としての方針やプロジェクトはないのか？ また、個人プレーであることの利点は何か？

<感想>

- ・この公共人類学という本一冊を通して、人類学の一歩の特徴であり最も成果を残せる部分はフィールドワークであると感じましたが、このフィールドワークは長期的なものではないと十分な成果が得られないということも感じたので、帰国後に関係が途切れてしまうのはもったいないと思った。
- ・学会での評価を優先してしまう現状があるなら、学会全体として変革が必要ではないかと思った。
- ・民族や気候、価値観や経済状況が大きく異なっても、災害時など特定の状況下においては共通の問題が生じるというのは興味深いと思った。また、どこかでのフィールドワークが他の地でもいかせることになるため、人類学の災害時の貢献はその点にあるのではないかと思った。